

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第407号 平成24年10月4日

ごんぎつね(1)

「ごんぎつね」という物語は、国語の教科書にも掲載されており、大人から子どもまで、沢山のの人に親しまれている大変有名な作品です。

作者は、新美南吉（本名新美正八）氏で、1913年愛知県半田町（現半田市）に生まれています。

今、北海道文学館では、この新美南吉氏（以下「南吉」といいます。）の生誕100年を記念して、10月21日（日）まで「ごんぎつねの世界」展が開催されています。

南吉は、その短い生涯の中で「ごんぎつね」「牛をつないだ樁の木」など100編以上もの作品を残しています。また彼は、教師を務めながら作品を書き続けたという点で宮沢賢治と比較して語られることもあります。

南吉の作品は、新しい時代と古い時代、子どもと大人、社会と個人、人間と動物、そして善と悪など、大きくふたつの世界が、つながれるか、理解しあえるかどうか、といった主題で展開されており（北海道文学館「会報90号」から）、「ごんぎつね」という作品も同じように展開して行きます。

「ごんぎつね」は南吉が18歳の時に書いた作品といえますから驚きですが、そこに描かれている、やりきれない不条理の世界とそこに生きている人たちの哀歓、そして、そういう世界に対する作者の愛情が、読む者の心を引き付けて止みません。

ここで、「ごんぎつね」のあらすじを紹介しましょう。

ぎつねの「ごん」は、両親のいない独りぼっちな小ぎつねで、村へ出てきては悪戯ばかりしていました。

ある秋の日、長雨が止んでほっとして穴から出ると、川で兵十が魚を捕っているのを見つけます。そして、兵十が目を離した隙に、兵十が捕った魚やウナギを逃すという悪戯をしてしまいます。

それから十日ほど経った日の事、兵十の母親が死んだことを知ります。その晩、「ごん」は穴の中で考えました。「兵十のおっかあは、床についていてうなぎが食べたいといったに違いない。あんな悪戯をしなければ良かった」と。

「ごん」は、独りぼっちになってしまった兵十を見て、「おれと同じ独りぼっちな

兵十か」と思います。そして、兵十にうなぎの償いをすることにします。

そこで、鰯を盗んで兵十の家に投げ込んだのですが、それがあだになって、鰯泥棒と間違われた兵十が鰯屋に殴られた事を知ります。それからというもの、「ごん」は、毎日山に入って栗や松茸を採ってきては兵十の家に届けます。

勿論兵十は、毎日届けられる栗や松茸の意味が判らず、神様のおかげだと思い込んでしまいます。それを聞いた「ごん」は、「おれにはお礼をいわないで神様にお礼をいうんじゃ、おれは引き合わないなあ」と思います。それでも「ごん」は、兵十の家に栗や松茸を届けるのを止めようとはしませんでした。

その翌日のことです。「ごん」が、いつものようにこっそりと家の中に入ると、その気配に気づいた兵十は、「ごん」がまた悪戯に来たのだと思い、火縄銃で「ごん」を撃ってしまいます。

兵十が駆け寄ってみると、土間に栗が固めて置いてあるではありませんか。兵十は驚いて「ごん、おまえだったのか。いつも、栗をくれたのは。」と問いかけると、「ごん」は目を閉じたままうなずきました。

兵十は、火縄銃をぱたりと落とし、筒口からは青い煙が出ていました。

南吉は、4歳の時に母親が29歳の若さで亡くなります。その後、小学2年生の時には母の実家である新美家に養子に出されます。

南吉は、人間は本質的には孤独な存在だと考えていたようですが、幼いころの、母の死と新美家へ養子に出された体験が、彼の心に深い陰影を与えたに違いありません。

また、南吉は母親と同じように病弱でした。彼は、中学卒業時に

我が母も 我が叔父もみな天死せし

我また三十を こえじと思うよ

という歌を残していますが、その歌で予言した通り、29歳という若さでこの世を去ることになるのです。

このように、南吉自身は、幼いころから、常に、自分の力ではどうにもならない不条理なもの向き合っていたのであり、そうした心の有り様がまた、「ごんきつね」の物語の中にも投影されているといえましょう。〈続く〉

(塾頭：吉田 洋一)